

# 益田市遠田地区遺跡分布調査報告書 I

1986年度

1987. 3

益田市教育委員会

# 益田市遠田地区遺跡分布調査報告書 I

1986年度



大元 1 号墳

1987. 3

益田市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は1986（昭和61）年度国庫補助事業として、益田市教育委員会が行った遠田地区遺跡分布調査の概報である。
2. 調査は島根大学考古学研究室及び島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査主体 益田市教育委員会教育長 水上孫市

調査指導 島根大学法文学部教授 田中義昭

安来第一中学校教諭 勝部 昭

島根県教育委員会 西尾克己

事務局 益田市教育委員会社会教育課長 桐田泰治

　　社会教育課係長 大庭清弘

調査員 益田市教育委員会社会教育課主事 木原 光

調査補助員 大谷晃二 佐藤雄史 宮本正保 新海正博 松尾晴司 松山智弘 大西

貴子 岩本悦子 柴尾由美（以上島根大学生） 後藤和正（別府大学生）

外山 彰（愛媛大学生） 道端 実

作業員 岩崎善嗣 高橋好市 高橋房子

3. 遺跡にはそれぞれ番号を付し、本文、遺跡分布図を通じて統一した。また『全国遺跡地図—島根県—』に登載されているものについてはその遺跡番号を示した。
4. 古墳候補地についてはアルファベットの小文字で表わした。
5. 大元1・2号墳の測量にあたっては土地所有者である大島敏、大谷寿雄、沢江喬、高橋好市の各氏から快諾を得た。記して感謝する。
6. 掘岡内の方針は磁北を示している。
7. 本書の編集執筆は木原が行った。

## 目 次

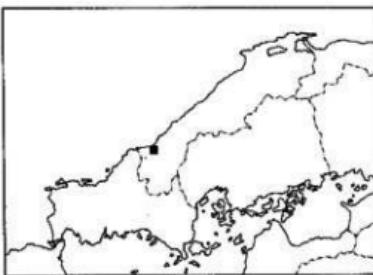
1.はじめに	1
2.調査の概要	2
3.各遺跡の概要	
1. 神出遺跡	3
2. 山城畠遺跡	4
3. 宝珠庵溢遺跡	4
4. 嶽城跡	4
5. 康神塚遺跡	5
6. 北ノ平経塚	6
7. 木原古墳	7
8. 金堀1号墳	7
9. 金堀2号墳	7
10. 木原溢奥遺跡	7
11. 神明北遺跡	7
12. 神明古墳	8
13. 神明南遺跡	8
14. 蔵ノ段遺跡	8
15. 平遺跡	8
16. 柳ヶ瀬古墳群	8
17. 貝崎古墳	9
18. 大元古墳群	10
19. 北ヶ迫遺跡	11
20. 森ヶ内古墳	12
21. 石仏古墳	12
22. 二反田遺跡	13
4.おわりに	13
5.遠田地区遺跡一覧表	14

## 挿 図 目 次

第1図 益田市位置図	1
第2図 遠田町位置図	2
第3図 神出遺跡採集須恵器片実測図	3
第4図 宝珠庵溢遺跡採集須恵器片実測図	4
第5図 嶽城跡遺構位置図	5
第6図 嶽城跡周辺遺跡分布図	6
第7図 大元古墳群周辺遺跡分布図	9
第8図 石仏古墳周辺遺跡分布図	11
第9図 大元古墳群墳丘実測図	
第10図 遠田町遺跡分布図	

## 1. はじめに

益田市は島根県の西端に位置し、山口市と結ぶ国道9号線と下関市へと向う191号線が交差し、山陰本線から山口線が分岐して山陽本線に接続するなど、山陰地方西部と山陽あるいは北九州地方を結ぶ交通の要衝でもある。さらに、中世以降商取引きを中心に発展を遂げ、現在では念願であった空港建設事業にも着手し、石見地方の拠点都市となりつつある。市域は高津川と益田川の二大河川によって形成された沖積平野を中心広がるが、三方を低丘陵性の山に囲まれ、北は日本海へと開く。



第1図 益田市位置図

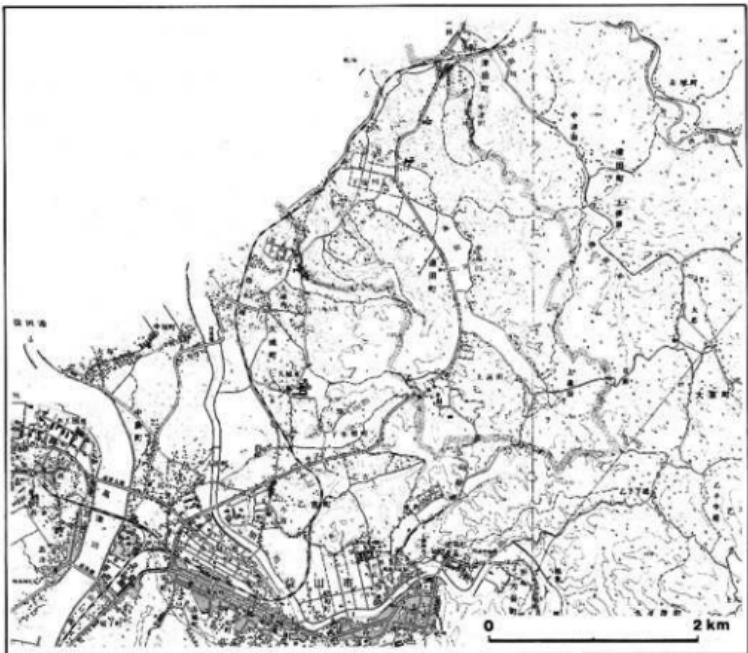
本事業の対象となった遠田町は益田市街の東に位置し、面積は約4.27km<sup>2</sup>、人口は1500人あまりの町である。中央部には比礼振山(358.8m)北西の乙子下組に端を発する遠田川が北流し、両岸に緩やかな河岸段丘を形成しながら日本海へ注ぐ。周囲には舌状に張り出す低丘陵が複雑に入りくみ、その間に大小の谷が刻まれているが、遠田川の下流域一帯はかつての入江と考えられ、ごく平低の湿地帯で水田が広がっている。さらに、遠田川は水量が少ないため、町内にはおよそ150にも及ぶかんがい用のため池が点在する。また、遠田町の西側の丘陵地には、遠田トンネルを抜け浜田市へ至る国道9号線が走り沿岸部には山陰本線が通っている。

さて、遠田という地名は益田本郷に遠い里という意に由来するといわれ、「和名抄」に記されている美濃郡八郷のうちの芥気郷の属村と考えられている。中世には益田荘のひとつとして矢富名とよばれ、記録としては応安4年(1371)の「益田祥兼請文案」に「遠田村号弥富名」とみえるのが初見である。江戸時代には浜田藩領に属していたが、明治22年に安田村となり、さらに昭和27年より益田市の大字になり、昭和47年から現行の遠田町となった。

## 2. 調査の概要

分布調査の対象となった遠田町地内には典型的な群集墳である鶴ノ鼻古墳群が存在し、昭和40年代の後半には大型の前方後円墳である大元1号墳が発見されたことなどから他に多くの遺跡が存在すると考えられている。さらにそれらの遺跡が縄文時代以降、中世や近世に至るまでの時代的な脈絡をもって営まれ続けた可能性は充分考えられるところである。

『全国遺跡地図－島根県－』によれば遠田町内には23箇所の遺跡が登載されており、その内訳は、散布地11箇所、古墳9箇所、窯跡1箇所、寺院跡1箇所、城跡1箇所である。また、益田市誌等を参考にすれば、これらの他に10箇所以上の遺跡が追加されるようである。その中には、現在までにすでに消滅したり、もはや所在を確認することができないものも



第2図 遠田町位置図

かなり含まれるであろうが、今回の分布調査を契機に相当数の遺跡が発見されると思われる。

さて、昭和49年度から国営総合農地開発事業の一環として益田開拓建設事業が開始された。これは高津工区と益田工区の両工区で農地造成 719ha、区画整理 266ha を内容とする事業で、遠田町においても東部丘陵地帯で大規模な造成が行われ、遠田川沿いの水田も圃場整備をすでに終了している。遺跡保護の側からすれば危機的ともいえるこのような状況から、遠田町内に所在する遺跡の掌握が必要となり、昭和61年より63年の3ヶ年にわたり国庫補助事業として遠田地区遺跡分布調査に着手することとなった。

昭和61年度の分布調査は、遠田川右岸の市道神出・黒石線の東にあたる丘陵地帯を対象として周知遺跡の現状把握と新遺跡の発見に努めた。北は安田小学校前から西へ伸びる谷まで、南は県道益田・種・三隅線までが結果的に調査範囲となった。また、今年度は分布調査の他に大元1号墳の墳丘実測もあわせて行っている。

以下、今年度の調査で明らかにされた遺跡の概要を述べる。

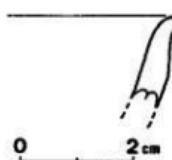
### 3. 各 遺 跡 の 概 要

#### 1. 神出遺跡 (第6図1) 益田市遠田町神出

遠田川右岸の丘陵裾を走る市道神出・黒石線は、下遠田で国道9号線に合流する神出線と、丘陵を横断して神出堤の北から安田小学校前を通り同じく国道に接続する下遠田・黒石線に分岐する。

遺跡はこの交差点から南東へ約100mの道路沿いに位置する。現状は畠地で、付近は南向きの緩斜面となっている。

当遺跡で採集された遺物は須恵器で、环、壺、甕などの破片である。このうち壺の口縁部の破片は、ゆるやかに内わんしながら立ち上がり、端部をわずかに外反させて丸くおさめている。



第3図 神出遺跡採集須恵器片

## 2. 山城畠遺跡 (第6図2) 益田市遠田町神出字山城畠

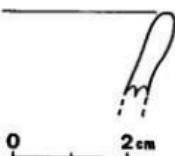
安田小学校前には、神出堤を経てさらに奥部の赤松堤へと至る約1kmの谷が西へ入りこんでいる。遺跡は家ノ溢とよばれるこの谷あいの中ほどにあり、標高25m前後の畠地に位置する。

今回の調査で採集された遺物は須恵器および土師質土器であるが、いずれも細片であった。遺跡の中心は、遺物の採集されたみかん畠の直上に広がる西向きの緩斜面と考えられるが現在は荒地となっている。

## 3. 宝珠庵溢遺跡 (第6図3) 益田市遠田町城外

遺跡は市道神出・黒石線沿いに建てられている城外公民館の背後に立地する。現状は水田で、標高は約20mを測る。

遺物として須恵器片数点が採集されたが、このうち杯の破片1点を図化しておく。欠けている杯部の中位はわずかに内わんしていたものと観察されるが、口縁部はほぼ直線的に伸びあがり、その端部は単純に丸めてある。



第4図 宝珠庵溢遺跡  
採集須恵器片

今回の調査においては、遺物の数も少なく遺跡の実体は今のところ不明である。

## 4. 獅城跡 (第6図4) 益田市遠田町城外字嶽 島根県遺跡番号1737

獅城跡は一名遠田城ともよばれ、標高75mの丘陵頂上に立地する。北西はなだらかな尾根へと続くが、残る三方は比較的急峻な斜面で囲まれる好所に位置している。

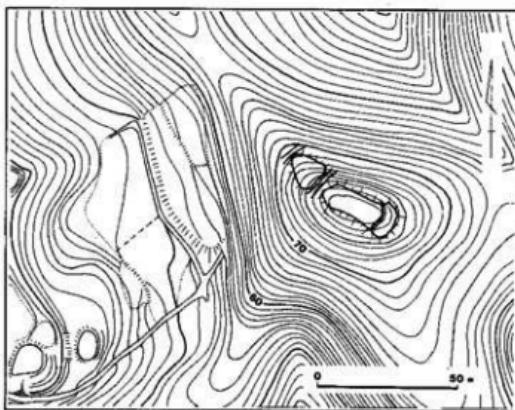
造構としては、3ヶ所の平坦面と2ヶ所の掘り切りが存在する。便宜上、郭の呼称は南から北へ順に第1郭から第3郭とした。第1郭は長辺23.5m、幅約8.5mの長方形部分が削平されており、その規模から主郭と考えられる。さらにその南東には約0.8mの比高差をもってテラス状の平坦面が築かれており、長辺約10m、幅5mを測るが、きわめて不整である。なお、第1郭の東西2ヶ所が昭和58年7月豪雨災害により崩れ落ちている。

第1郭の北西には一段下がって第2郭が存在する。第1郭との比高差は約4mほどで、その間に明瞭な掘り切りが残る。第2郭は長軸方向約11m、幅13~7mの平坦面であるが、細長く伸びる尾根上に築かれているためその幅は地形的な制約を受けて次第に狭くなっていく。さらに、第2郭の北西には深さ約0.6mの掘り切りが設けられている。

さて、益田氏八代兼胤の四男兼種は遠田に封ぜられ、以後遠田氏と称したが、獅城はそ

の後を継いだ兼治の末孫兼相が築いたと考えられている。遠田氏はこの城を本拠城として、関ヶ原の役まで続いた。

なお、本城跡の西および南西の谷筋には、屋敷跡を思わせる「古土井」や「城平」「風呂屋敷」等関連する字名が残っている。このようなことから、平常時は谷あいの平地で生活し、戦時にはこの城に立てこもって外敵に備えたものと考えられる。

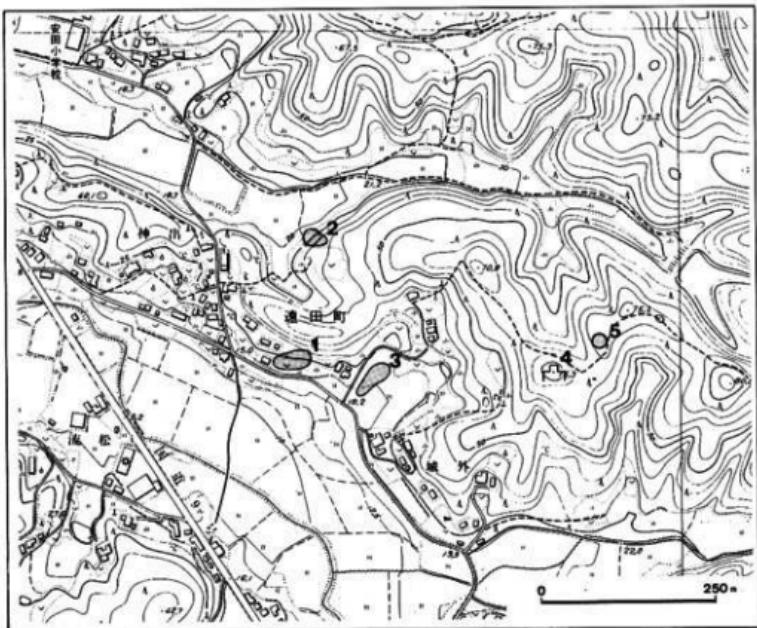


第5図 城跡造構位置図

##### 5. 康神塚遺跡（第6図5） 益田市遠田町域外

城から北東へ約150m、標高70mあまりの山頂に康神塚がある。塚はかなり変形を受けているようで、東西約5m、南北2.5mの不整な楕円形を呈し、高さは約0.8mを測る。中央部には高さ1mの石碑がえられ、そのまわりを人頭大の石数個で支えている。この石碑は、現在では北へ傾いており、表面には「享保九稔、予背面金剛講中、甲辰二月吉日」と刻まれている。また、この塚の北には約300mの平坦地があり、地元の古老たちは武道場とよんでいるがその由来は不明である。

康神信仰は中国の道教で説く三尸（さんし）説を母体として、密教、神道、修驗道あるいは民間信仰と結びついた複合信仰であるが、この三尸説が日本に伝わったのは8世紀後半頃といわれている。この信仰は室町時代に入り仏教と結びついて一般の人々にも広まり、功德は貧苦、災難の除去、延命などで背面金剛、観音、阿弥陀を崇拝の対象とした。さらに江戸時代に入ると僧侶や修驗者らによって真宗地帯を除く全国各地に浸透していったが、ここ遠田の地にもこの信仰が伝わり、一般民衆の生活が困難な当時、近隣の人々が熱心な信心によってこの塚を築いたと考えられる。



第6図 嶽城跡周辺遺跡分布図

#### 6. 平ノ北の塚 (第7図6) 益田市遠田町神明字北ノ平

下遠田の城外地区と神明地区の間を比較的広い谷が西へ伸びており、さらに測れば彌谷堤に至る。遺跡はこの谷の南側から西へ分かれる木原澙の入口付近に位置し、市道神出・黒石線から約250mの距離である。

遺跡の背後は削り出しによって形成されていたと考えられるが、西から北にかけての周囲は約4mの比高差がありかなり急な斜面となっている。中央部には9個の石材を集め、そのうち1個を立てて据えている。また、後述するように後世に変形を受けたものと思われ、全体的に整った形を残していない。この遺跡は地元では千人塚ともよばれ、江戸時代に飢餓のため餓死した人達を供養したものと言い伝えられている。昭和16年にその一画が崩れた際に経文字を書きつけた小碑が出土したといわれており、いわゆる一字一石経塚

と考えられてきている。

### 7. 木原古墳 (第7図7) 益田市遠田町神明字木原

古墳は標高70mあまりの丘陵頂上に位置していた。当古墳は国営総合農地開発事業益田開拓建設事業に伴い、昭和56年度に益田市教育委員会によって発掘調査が実施されている。

調査の結果、箱式石棺が2箇所で検出され、副葬品として鉄劍一口が出土した。15m前後のやや不整な円墳で、時期的には古墳時代中期と考えられる。

なお、当古墳は造成工事によりすでに削減してしまっている。

### 8. 金堀1号墳 (第7図8) 益田市遠田町神明

### 9. 金堀2号墳 (第7図9) 益田市遠田町神明

益田開拓建設事業に伴い発掘調査がなされたが、2基とも遺物や遺構は検出されず、古墳と確認するには至らなかった。

### 10. 木原溢奥遺跡 (第7図10) 益田市遠田町神明

益田開拓7号幹線道路は市道神山・黒石線から分かれ瀬谷溢の南側から木原溢に沿って開拓地に至るが、遺跡はその道路を登りきった南側に位置する。一帯は造成地の西端にあたり、その直上には標高約68mの山が約半分削り取られて残っている。

遺跡は西向きの比較的急な斜面の一画に位置し、造成工事による断面に須恵器を含む土層が認めら、付近には多数の須恵器片が散布していた。須恵器は甕の破片がほとんどであるが、他に高杯の杯部と思われる破片もあった。甕のほとんどは裏面のタタキ痕をナデて消している。

現段階で遺跡の性格を判断することは困難であるが、一応窯跡の存在も想定しておきたい。

### 11. 神明北遺跡 (第7図11) 益田市遠田町神明

遺跡は瀬谷溢と別所溢に挟まれる丘陵地の北に位置し、標高は約30mであり、小さな谷の西向き斜面に存在する。

今回の調査では若干の須恵器片を採集したのみで、遺跡の範囲などについては今のところ不明である。

12. 神明古墳 (第7図12) 益田市遠田町神明

古墳は神明公民館の裏、標高5.0mの丘陵頂上に立地する。

墳形は円墳と考えられ、直径約10m、比高1.5mを測る小規模な古墳であるが、松林中に良好に遺存している。

13. 神明丘遺跡 (第7図13) 益田市遠田町神明

遺跡は神明丘陵の南側斜面に位置する。現状は宅地に開まれた畠地である。

今回の調査では須恵器片および土師器片をそれぞれ1点ずつ採集するにとどまり、遺跡の詳細を明らかにすることはできなかった。

14. 蔓ノ段遺跡群 (第7図14) 益田市遠田町大元字藏ノ段

遺跡は別所溢の南側段丘上に立地し、標高は3.0mあまりである。現状は水田で、背後にかけては松林がある。

踏査によって須恵器片2点が採集されたが、時期等を推定できる良好な資料は得られていない。

15. 平遺跡 (第7図15) 益田市遠田町大元字平

遺跡は、国道9号線を中遠田で東へそれで馬場橋を渡った三叉路のやや南寄りに位置する。現状は畠地で、標高は2.5mから3.0mの西向きの斜面である。

採集された遺物は須恵器片2点であった。

16. 柳ヶ溢古墳 (第7図16) 益田市遠田町大元字柳ヶ溢

大元古墳群の立地する丘陵は大きく西へ張り出し、標高4.0mから4.5mにかけてはかなり広い平坦地が存在する。古墳はその西縁辺部に2基存在する。東寄りの古墳を1号墳、さらにその西に約10m離れて存在する古墳を2号墳とした。一帯は現在松林となっている。

1号墳は直径約7m、高さ0.7mの円墳と考えられる。すぐ西の裾を山道が通っているため若干変形している。

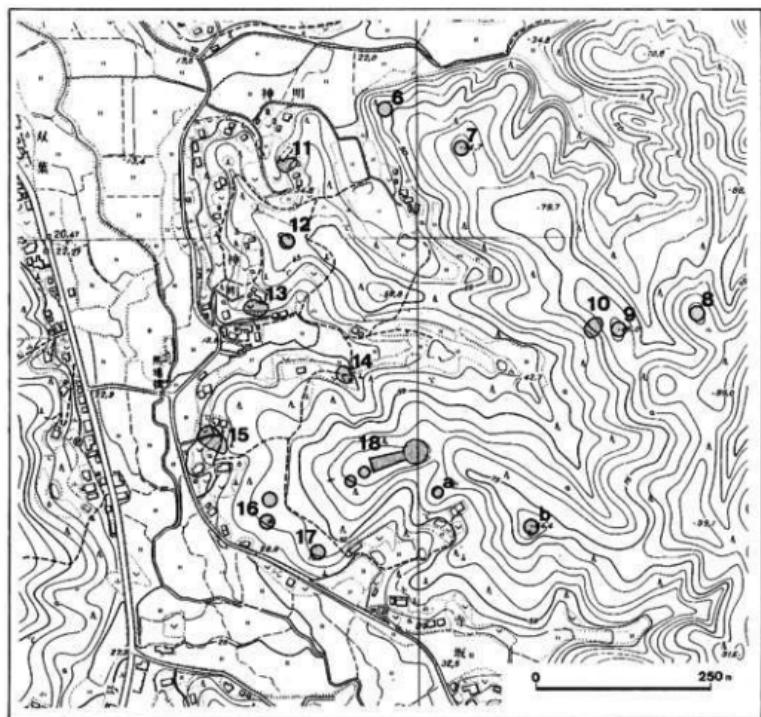
2号墳は径6mあまり、高さは約0.6mを測る。東側の一部が少し削平されている。

これら2基の古墳は盛土によって形成されたと考えられるが、ともに良好に保存されている。

### 17. 貝崎古墳 (第7図17) 益田市遠田町大元字貝崎

貝崎古墳は、柳ヶ溢古墳群から小さな谷を隔てた標高約45mを測る丘陵先端部に立地する。そのすぐ東には迫ノ溢の谷が北東へ入り込み、現状は松林である。

古墳は後世に盗掘を受けたらしく、中央部分が大きく陥没して周囲の盛土を残すのみの状態であった。盗掘跡から、古墳の開口方向は南東と推定されるが、主体部を構成していた石材や遺物を発見することはできなかった。なお、尾根続きとなる古墳の東側は削り出しによって形成されている。



第7図 大元古墳群周辺遺跡分布図

## 18. 大元古墳群 (第7図18) 益田市遠田町大元字焼山

大元古墳群は別所溢と追ノ溢に挟まれた丘陵上に位置し、下遠田の平野部を一望のもとに見渡せる好所を占めている。標高は1号墳の裾部で約6.4mを測る。

この大元古墳群は昭和48年の島根県下埋蔵文化財分布調査によって発見された。その後1号墳については昭和56年より主要部分の測量調査がなされ、全長9.0m近い前方後円墳であることが判明し、県下でも有数の大型前方後円墳として注目されてきている。今年度は分布調査の一環として、25cmセンターで1号墳及び隣接する2号墳の墳丘実測を行ない、過去の成果をさらに充実することができた。

古墳は松林の中に東から1号墳、2号墳と裾を接するように並んでいる。1号墳については昭和58年7月の山陰豪雨災害により被害を受けたが、ともに盗掘を受けておらず比較的良好な状態で遺存しているといえる。

1号墳は全長■mの規模を誇る大型の前方後円墳で、後円部径約4.5m、後円部の高さ8~11m、前方部長約4.5m、前方部の高さ4.3m、前端部幅約3.0m、くびれ部の幅約3.0mをそれぞれ測る。また、後円部と前方部の比高差は2.8mほどで、古墳の主軸は磁北から約6.8度東へ振っている。■。後円部の北は一部崩壊しているが、残る部分については少しくぼんだような状態で急峻な斜面となっており、後円部の東側は丸みを帯びずに直線的な等高線を描く。また、南側も豪雨災害により墳丘のかなり上位から封土が押し流されて原形が損われている。墳頂部には、楕円状に平坦面があり後世に削平を受けたものと考えられる。

一方、前方部は先端がほとんど開かずに長く伸びる、いわゆる「柄錐形」前方後円墳の形態を呈する。南側は裾に沿うように道が通り、さらにその外側は谷へ向かって急斜面となっている。前方部の北は下遠田の平野部を意識してか、みかけの墳裾はかなり下がった標高5.9mあたりに認められた。また、墳頂部には長辺約8m、短辺4mあまりの方形状に平坦面がある。さらに、くびれ部分の北面には造り出し状に墳丘が張り出し、その西にはかなり広いテラスが存在する。

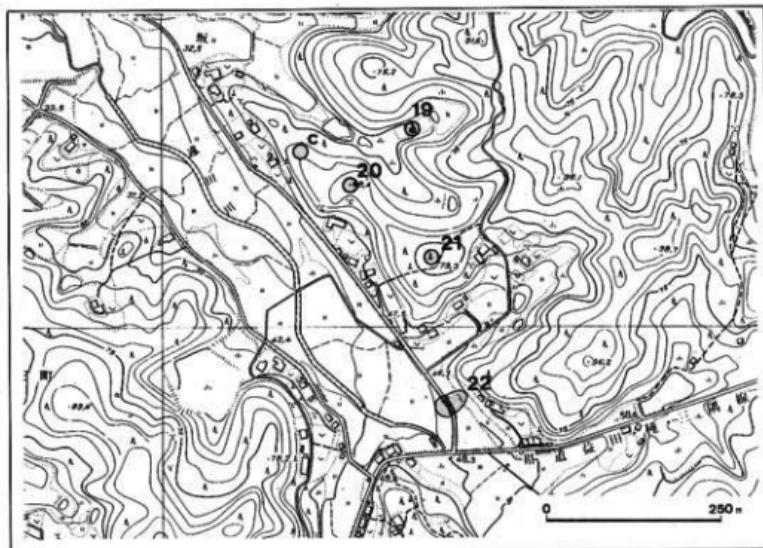
この前方後円墳は南西に伸びる尾根を切断して形成されているが、後円部は比較的狭い尾根上に築かれていたため、その平面形は整った円形をなさず、特に北から東にかけてかなりいびつな形となっている。また、前方部の南側と北側におけるみかけの墳裾の比高差も、こういった築造前の地形に大きく影響を受けたために生じたものと考えられる。

また、1号墳全体に栗石大の葺石がみられるが、特に後円部の東側から北側にかけて良く残る。さらに後円部墳頂から土師器片および埴輪片が多数採集されている。

1号墳のすぐ西に2号墳が存在する。1号墳の主軸線から南へずれて立地しており直径約15m、高さ1.2mを測る円墳である。

さらに、この2号墳から西の尾根続きに墳丘状の高まりがある。直径約12mのきわめて不明瞭なもので古墳と決定することは難しいが、今のところその可能性も残しておきたい。

以上のように大元古墳群は、その立地あるいは形態から古墳時代の中期前半から前期にも溯る可能性もあり、今のところ石見地方における最古の古墳と考えられる。今後は、これまでに採集された遺物についても検討した上で、築造の時期等を明らかにしていきたい。また、古墳周辺部を取り込んだ測量調査も次年度に継続して予定している。



第8図 石仏古墳周辺遺跡分布図

19. 北ヶ迫遺跡 (第8図19) 益田市遠田町寺坂 總合遺跡番号 1802

『安田村発展史』によれば、文政3年（1820年）に小松山の裾を開墾した時、鏡1面、壺2個体が出土したとある。詳細は不明だが、この遺跡は以後北ヶ迫遺跡とよばれ、南東から北ヶ迫へと突き出している寺坂の細長い丘陵先端部付近に位置すると考えられてきていた。

しかし、先の文献の内容を充分検討すれば、遺物が出土したのは原ヶ迫の水田と解釈でき、この原ヶ迫という地名は古森堤の奥部に現在も残っている。一方小松山はどの山を指すのかは地元の古老に尋ねても明らかにできなかった。

以上のように、この遺跡の位置については誤った認識のまま今日に至っている可能性があり、原ヶ迫という地名を重視すれば実際には現在の古森堤の奥に存在したのではないだろうか。

#### 20. 森ヶ内古墳（第8図20） 益田市遠田町寺坂字森ヶ内

古墳は遠田川の右岸を走る市道に沿うように北西へ細長く伸びる小丘陵のほぼ中ほどに位置し、寺坂公民館の裏山にあたる。古墳の直径は約10m、高さは0.9mを測り、標高6.8mの尾根上に築かれている。

なお、この古墳から尾根づたいに約100m北へ行った所に、高さ約0.8mで直径6m前後のマウンドが認められた。ちょうど尾根づたいの山道と、丘陵を横切る道が交差する地点に所在するため、周囲がいびつな形となっているが、一応古墳の可能性を考えておきたい。

#### 21. 石仏古墳（第8図21） 益田市遠田町寺坂字経塚 島根県遺跡番号1690

古墳は上遠田から東へ入る益田開拓遠田22団地進入路の北、水田地帯を見下す標高7.7mあまりの山頂に位置する。背後には後面の谷が北西からまわり込み、古墳の立地する丘陵の北側は造成工事によりすでに削り取られている。

マウンドは直径約10m、比高1.2mの円形を呈し、その墳頂部には幅0.5m、高さ1mあまりの石材を立て、さらに前面に厚さ0.4mの石材がすえられている。あたかも墓を思わせるようで、これが石仏古墳とよばれるゆえんであろう。

この遺跡については一方で、経塚であるとの言い伝えも地元に残っている。江戸時代の飢饉によって餓死した人々を供養するため、ここに一字一石経塚が築かれたというものである。そのため経塚という小字名が残っていると考えられるが、内容を確認することのできない現時点では、従来どおり古墳と認識しておくことにする。

## 22. 二反田遺跡 (第8図22) 益田市遠田町寺坂字二反田 島根県遺跡番号1806

遺跡は遠田川右岸の低い段丘上に位置する。県道益田・種・三隅線から市道神出・黒石線に分れて北へ約50mのところで、現状は水田となっており、標高は4.5mから5.0mを測る。

この二反田とよばれる水田からは、以前より須恵器片が採集されており、昭和58年1月には圃場整備益田5団地工事に伴い、市道の西側の水田を対象に試掘調査が実施され多数の須恵器片が出土した。この調査では面積も限られ、遺跡の性格等を明らかにすることはできなかったが、市道の東側にも遺物の散布が認められ、遺跡の広がりはある程度確認されている。

## 4. おわりに

今年度の分布調査は遠田川右岸の丘陵地を中心に行なったが、これまでに周知遺跡となっているものを含め22遺跡を確認することができた。このうち8遺跡が今回の調査によって新たに発見された。

遺物散布地については、採集された遺物が少量かつ断片的なため遺跡の時期や性格を明らかにできないものが多く、将来にわたり資料を蓄積していく必要がある。今のところ、縄文時代や弥生時代の遺物は採集されておらず、これらの遺跡は古墳時代あるいは奈良時代以降の所産と考えられよう。

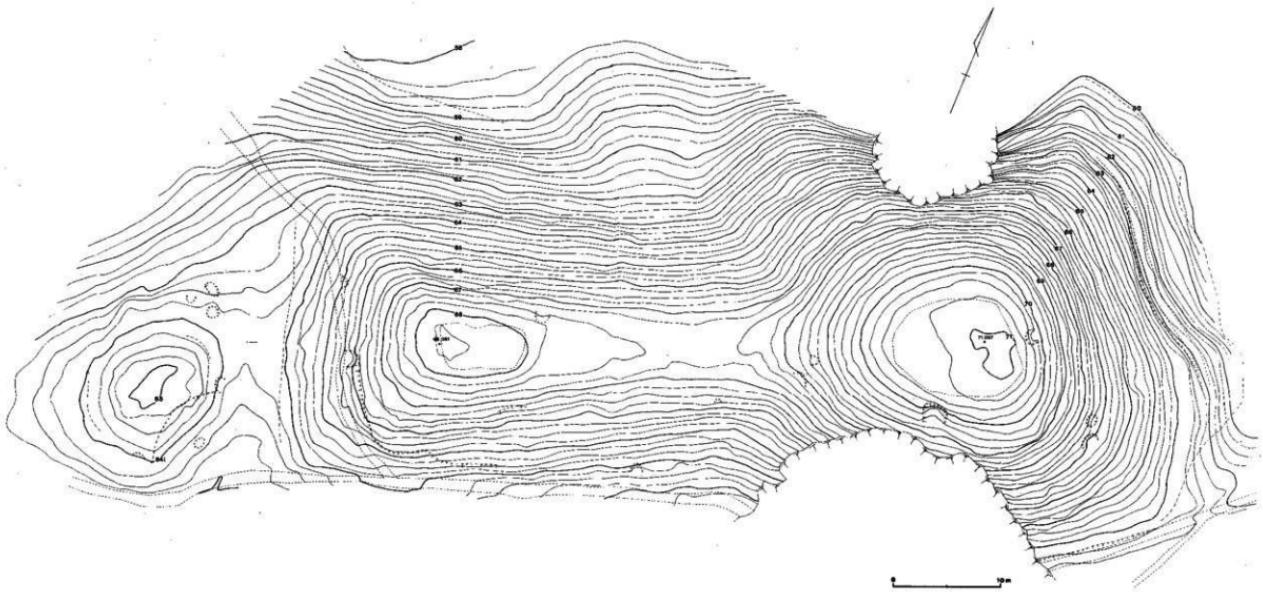
さらに、今回は大元1号墳の墳丘測量を実施することができた。主要部分の測量にとどまつたが、その規模は周辺の小規模古墳とは隔絶の感がある。今後は、この大型前方後円墳が益田平野から離れたここ遠田の地に築れるに至った背景についても総合的な考察を加えていかなければならぬ。

以上今年度の調査の概要を述べてきたが、続く昭和62年度、63年度の分布調査によって残る部分の踏査を行ない、最終的には遠田町全域に所在する遺跡の把握に努める計画である。また、一連の成果が広く利用され、遠田町ひいては益田市の歴史的性格を理解し、そこに残された歴史遺産を保護、活用するための一助となれば幸いである。

遠田地区遺跡分布調査は緒についたばかりで、その中に点在する個々の遺跡の性格はいまだ漠然としたものが多く、それらの時代的脈絡も充分つかみきれない。今後多くの方々からご指導、ご教示を請うしだいである。

遠田地区遺跡一覧表(昭和61年度分)

番号	遺跡名	種別	所在地	概要	備考
1	神出遺跡	遺物散布地	益田市遠田町神出	須恵器片	
2	山城畠遺跡	"	神出字山城畠	須恵器片 土師質土器片	新発見
3	宝珠庵遺跡	"	城外	須恵器片	"
4	鐵城跡	城跡	城外字鐵	遠田城ともいう 郭2箇所 挖り切り2箇所	
5	康神塚遺跡	康神塚	城外	「享保九稔ニ青面金剛講中」の銘あり	
6	北ノ平経塚	経塚	神明字北ノ平	一字一石経塚か	
7	木原古墳	古墳	神明字木原	昭和56年度発掘調査 円墳(径15m) 箱式石棺2基 棺消滅	
8	金堀1号墳	古墳?	神明	昭和56年度調査 棺消滅	
9	金堀2号墳	"?	神明	昭和56年度調査 棺消滅	
10	木原遺跡遺跡	遺物散布地	神明	須恵器片多數 窯跡か	新発見
11	神明北遺跡	"	神明	須恵器片	"
12	神明古墳	古墳	神明	円墳(径10m) 未発掘	"
13	神明南遺跡	遺物散布地	神明	須恵器片、土師器片	"
14	藏ノ段遺跡	"	大元字藏ノ段	須恵器片	"
15	平遺跡	"	大元字平	須恵器片	
16	柳ヶ瀬古墳群	古墳	大元字柳ヶ瀬	円墳2期(径6~7m)ともに未発掘	
17	貝崎古墳	"	大元字貝崎	円墳(径10m) 盗掘により半壊	
18	大元古墳群	"	大元字焼山	前方後円1基(全長98m) 円墳1基(15m)ともに未発掘	
19	原ヶ瀬遺跡	?	寺坂	鏡1面、壺2個体が出土したといわれるが詳細は不明	
20	森ヶ内古墳	古墳	寺坂字森ヶ内	円墳(径10m)	新発見
21	石仏古墳	"	寺坂字経塚	円墳(径10m) 経塚の可能性もある	
22	二反田遺跡	遺物散布地	寺坂字二反田	昭和58年度試掘調査	



第9図 大元古墳群墳丘実測図



第10図 滋田町遺跡分布図





嶽城跡



康神塚遺跡



北ノ平経塚



石仏古墳



大元 1 号 墓 墓頂より下遠田を望む



大元 1 号 墓 全 景



後内部墳頂平坦面



前方部全景



前方部北側の造り出し及び平坦面



測量風景



後円部南側崩壊状況



墓輪出土状況

益田市速田地区遺跡分布調査報告書 I (1986年度)

発行日 1987年3月31日

発行 島根県益田市常盤町1-1  
益田市教育委員会

印刷 島根県益田市常盤町7-3  
益田タイプ株式会社